



日本科学者会議 (JSA) 滋賀支部
NEWS LETTER

2023年10月8日発行 第96号
事務局長 小島 彬
TEL/FAX 077-589-3724
Email : akrkojima@ybb.ne.jp

**JSA 設立の趣旨に沿い、地球温暖化抑止
のための世界的な活動を進める時である**

滋賀支部事務局長 小島 彬

9月5日発行の兵庫支部ニュース265号にMさんが「今までは地球温暖化の結末と人類の行く末を見届けることはないと思っていたが、この調子では下手をすると人類の断末魔に立ち会うのかもと不安になる」と述べられていて、自分と同じ危惧を抱く会員もいると感じたが、その不安が現実とならないように我々JSAが今なすべきことは何もないのだろうか。

確かに9月20日に国連本部でのサミットでグテーレス事務総長が様々な異常気象に触れて「人類は地獄の門を開けてしまった」と述べたとの報道がなされている。今夏は特に異常に高温が続き、世界各国で異常気象による被害が発生した。もし日本を含めた先進諸国が温室効果ガスの実質排出ゼロ、石炭火力からの撤退、化石燃料への依存停止、途上国支援などの積極的な努力を行わないなら、産業革命前に比べて2.8℃の温度上昇になると予測されている。

ところが我国の政府は地震や津波の危険もある中で、原発事故の教訓を忘れたかのように利権に群がる大企業の儲けのために老朽化した原発の再稼働や新規建設にこだわり、国連が計画的な廃止を強く求めている石炭火力を維持し、大型火力発電所を建設している。またアメリカの言いなりになって防衛費に莫大な予算を割き、クリーンエネルギー創出の努力をほとんど行っていない。また領土拡大のために戦争を行なっている国もあり、そのような目先のことしか考えない指導者たちに住めない地球にされてはたまらない。

文学者には地獄絵の未来社会を想像豊かに描いてもらいたい、誰でも温暖化が進めば身近でどのようなことになるかは想像に難くない。平均気温が上昇すれば豊かな農産資源を有する滋賀県も様々な要因が重なり田畑での農業生産が次第に困難になっていく。

話は奈良時代に遡るが、大津市南部の田上山の木々

を大量に切り出し、牛車で瀬田川まで運び、船に乗せて瀬田川から木津川を経てその木材で奈良の都を建設した。その結果、田上山が丸裸になってしまい土砂が流れ出して草津川が典型的な天井川になった。今も田上山の山肌はその名残を示し、JRの電車は旧草津川のトンネルを通過している。野洲市内でも昭和20年代まで国鉄の汽車が煙を出して現在の希望ヶ丘から流れる旧家棟川のトンネルを通過していた。滋賀県で最大の野洲川も鈴鹿山脈から流れ出す土砂で天井川となり度々洪水に見舞われ、これらの川は近代河川工学の是非という点はあるが、ダムが造られ川底が掘り下げられるまでしばしば堤防が決壊し、住民が洪水の被害を被ってきた千年に亘る苦難の歴史を有している。

温暖化が進むと増々気象が荒々しくなる確率が高くなると指摘されており、高温や干ばつで次第に山々の木々が枯れ、度重なる豪雨で枯れ木と共に土砂が崩れだし、ダムを埋めてしまい川は枯れ木や土砂で湖南地域の川は再び天井川となる。琵琶湖に注ぎ込む他の多くの川も同様で度々川が氾濫し、豊かな滋賀の穀倉地帯は米の栽培が大打撃を受ける。全国的にも同様なことが起こり農業と飲料にも利用していたダムは機能しなくなって食料生産が減少し、特に首都圏での生活は困難となる。世界中でその地特有の異常事態が次々と起こり、食糧危機が到来して飢餓常態が生じ、食料の奪い合いが始まって秩序が乱れ、管理が徹底できない原発は極めて危険な存在となり、地球は次第に生き地獄へと突き進んでいく。

ところで我々のJSAは人文、社会、自然科学の学者、研究者、技術者等が加盟する総合学術団体である。その利点を生かして「学際研究・市民科学発展プログラム」が今行われだそうとしているが、地球温暖化抑止課題についてもその特徴を生かしたJSAならではの積極的な貢献ができはしないか。

幸いJSAはジョリオ・キュリーが初代会長の世界科学者連盟に加盟していたことがあり、今は科学技術の平和利用、地球の持続可能な発展のために設立された

INES (International Network of Engineers and Scientists for Global Responsibility) に加盟していて、これらのメンバーとの面識がある JSA 会員もおられるだろう。

自分自身の研究活動の経験から言えば、例え面識がなくても真理や道理があれば真摯に対応しようと努める科学者たちが欧米には沢山いる。従って JSA の国際部が様々な分野の会員の協力を求めて体制を強化し、上記の団体と密に連絡を取り合い、世界中の学術団体や学会が連名で、各国が真剣かつ早急に気候危機対策を行うように迫る声明を出す状況を作り出すように持っていく。また THE BULLETIN OF JSA を活用した情報発信も積極的におこなえばよい。

そこで先ず JSA 幹事会が専門家の意見も訊き、各国の最優先課題として、国連との連携のもとクリーンエネルギー事業の積極的な推進、温室効果ガスの実質排出ゼロ、即時石炭火力や化石燃料からの撤退、先進諸国共同による途上国支援の枠組み構築など、今すぐ地球温暖化抑止の政策を立て実行に移すように求める声明案を起草し、国際部が英文化して両団体に対し粘り強く働きかけ、両団体から世界各国の学術団体や学会に声明案の同意をえる作業を行うよう説得し手助けもする。それには JSA 国際部の積極的な役割が重要になる。日本国内の学術会議や様々な学会に対しては、それぞれに関係のある JSA 会員を通じて声明案を示し、同意をえることが可能であろう。

今 FFF (Fridays for Future) に結集する若者たちが熱心に地球温暖化抑止を訴えている。しかし彼らは最も温暖化の要因をよく知り、抑止のための方策も熟知しているはずの世界中の科学者たちが挙って立ち上がらない状況に、非常に悔しい思いでいるだろう。むしろ腹立たしい思いでいるかもしれない。我々が後は野となれ山となれということでは彼らに申し訳ない。

もしこのように世界の科学者が共同声明を出すという歴史的な偉業が実現すれば、FFF に結集する若者たちをはじめ、世界中の市民やマスコミは挙って大歓迎するであろうし、気候変動問題に悶々としている JSA 会員も少し安堵した気分になる。世界の科学者の大連帯は各国政府に少なからぬ影響を及ぼし、潮目が変わる状況が生まれることも夢ではない。

我々は JSA 設立の趣旨に沿って覚醒し、人類にとって今一番深刻な地球温暖化問題について国際的な活動を開始することを期待して提起を行なう次第である。なおこの活動を行なえば、第一線の研究者や学生・院生に JSA の存在を強く印象付けるに違いない。

野洲市の環境基本計画に基づき 15 年以上保護育成してきた自然豊かな野洲川河辺林を、当初から運営が危ぶまれる高専建設のために破壊していいのか 個人会員分会 小島 彬



今明治神宮外苑の貴重な樹木が伐採されそうで問題になっていますが、同様の自然破壊が滋賀でも行われようとしています。野洲市は 2007 年に環境基本計画を策定するため委員を公募し、当時県立大に在職していた私は委員になり環境関係の NPO の指導で市民と市が熱心に協議して環境基本計画を策定しました。私は緑の推進委員会の代表になり毎月メンバーと市の環境課職員が協議を行い、主要な課題の 1 つとして野洲川河辺林の保護育成作業を 10 年間推進してきました。放置されてきた県有地の河辺林は竹が生い茂る雑木林でしたが、蚊に刺されながら竹を切り、樹齢が 100 年以上する樺や榎などを残し、樹木医の中西肇さんの指導で榎などの実生を移植して、第 2 次環境基本計画段階の今では写真のようにきれいな森になっています。ところが 10 月 1 日の「滋賀民報」に詳しく報道されているように、県はこの場所に県立の高専を 2028 年に開校する予定です。少子化で今から運営が危ぶまれる高専建設に多額の費用を費やし、貴重な植物や動物が生息する県内有数の自然の河辺森が破壊されようとしている状況を、JSA 滋賀支部は広く県民に知らせる必要があると考えます。(写真は「滋賀民報」提供)